

# 高等学校商業科における学習意欲の向上

## ー 動機づけデザインに基づく授業実践 ー

学籍番号 179971

氏名 岡田 優太

主指導教員 中西 修一

## 1. はじめに

### 1.1 背景と目的

本実践課題研究で、学習意欲をテーマに挙げた理由は、報告者の大学時代の思いに遡る。それは、授業者がどんなに手応えのある授業ができたとしても、本当に生徒は授業や学習内容に対して、意欲的に授業中を過ごしていたのか、本当に学習内容を理解することができていたのかという報告者自身の疑問である。

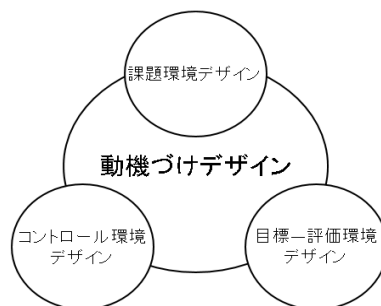
また、近年、様々な国際調査や地方自治体の調査により、日本の子どもたちの学習意欲に関する課題（図1-1、1-2、1-3）が明らかになっている。

以上の背景を踏まえ、本実践課題研究は、動機づけデザイン（鹿毛，2013）に基づいた授業を実践し、実習校の生徒の学習意欲の向上をめざすことを目的とした。

### 1.2 動機づけデザイン

鹿毛（2013）は、「しかけ」としての教育環境を「動機づけデザイン（表 1-2）」という考え方で整理している。「動機づけデザイン」は、学習意欲に関する研究である TARGET 構造モデル（Maehr & Midgley, 1991）や ARCS モデル（Keller, J.M, 2010）などに共通する点を整理し、課題環境デザイン、コントロール環境デザイン、目標—評価環境デザインの 3 側面から動機づけデザインを示している。

本実践課題研究は、基本学校実習Ⅱにおいて、主に課題環境デザインに基づいた授業実践を、発展課題実習ⅠおよびⅡで、目標—評価環境デザインに基づいた授業実践を行った。



動機づけデザイン(鹿毛, 2013)  
を参考に報告者が作成

## 2. 授業実践

### 2.1 基本学校実習Ⅱ

基本学校実習Ⅱでは、生徒にとって身近な課題を提示したり、グルーピングの工夫を通して、生徒の学習意欲の向上をめざした。具体的には、知識構成型ジグソー法（三宅，2016）を参考にした授業実践を行った。提示した課題に対する記述量（表 3-1）や記述内容（表 3-2）の変化から、生徒が主体的・対話的に学んでいる様子を把握することができた。そのため、本実践は生徒の学習意欲の向上に効果的に働いたと考えている。

## 2.2 発展課題実習 I

発展課題実習 I では、グループ学習ではなく生徒一人ひとりに注目し、毎授業後に学習内容の振り返り活動を取り入れることによって、「できた、分かった」という有能感を生徒一人ひとりに持たせることが、学習意欲の向上に有効だと考え、授業を実践した。

授業実践の事前事後を比較した質問紙調査の結果（表 4-1）より、学習意欲に関する数値に変化が見られたものの、有意な差は見られなかった。

しかし、事後質問紙調査の結果（図 4-3～4-6）を分析したところ、生徒に対して、授業で学んだことを振り返ることの大切さを伝えることができたと推測できる。また、生徒の授業参加行動を記録（表 4-2）することで、発展課題実習 II につながる課題が得られた。

## 2.3 発展課題実習 II

発展課題実習 II では、『学び合い』（西川，2012）の考え方を授業に取り入れることによって、生徒の学習意欲の向上をめざした。なお、実践前に上越教育大学の西川純教授の研究室を訪問し、直接ご指導いただいた点や授業見学を通して得られた知見を参考にした。

授業実践の事前事後を比較した質問紙調査の結果（表 5-1、5-2、5-3）より、授業中の生徒同士の関わりや授業に対する意識（興味や関心）、学習に対する効力感に変化があり、いずれも有意な差が見られた。また、発展課題実習 I より継続して記録した授業参加行動にも、『学び合い』の授業では一部の生徒において改善が見られた（表 5-7）。

さらに、伊藤（2016）の先行研究に基づき、質問紙調査によって、授業を受ける側である実習校の生徒がこれまでどのような授業によって、学習意欲を高めてきたのかも調査した。その結果、グループになって教え合ったり、協同で問題を解いたりする授業にやる気が出ると答えていることが明らかになった（表 5-4～5-6）。

# 3. 実践の総括

上記の授業実践における取組から、生徒の学習意欲の向上につながる可能性を見出すことができ、報告者なりの結論を示すことができた。

一方で、本実践課題研究は、実習ごとに手立てを見直して実践している。そのため、いずれも短期的な実践となっている。今後は、長期的な実践が生徒の学習意欲にどのような効果があるのかを検証する必要がある。

そして、最終章において、動機づけデザインの考え方および本実践課題研究を通して得られた知見に基づく1つの授業を提案した。提案した授業は、高等学校商業科の授業であり、1時間分である。このような動機づけデザインに基づく授業は、校種、教科、科目等に関係なく活用可能である。これらの成果を踏まえ、今後も、動機づけデザインに基づく授業を長期的な視点で継続的かつ組織的に実践し、生徒一人ひとりの学習意欲の向上をめざしていきたい。

最後に、報告者自身は、学校が生徒一人ひとりにとって、楽しく、何事にも意欲的に取り組める場であってほしいと願っている。学校生活において、多くの時間を占める授業の場で、生徒一人ひとりが意欲的に学習することができるよう「学び続ける教師」として教育活動に努める。